# 環境を救済するレンタル思想（２０１０・３・３０）

四月になると、新入の社員や学生が都会へ移動してくる機会が増大する。住居は賃貸が大半にしても、家庭電化製品などは新規に購入するのが一般である。ところが最近、レンタルで用意する場合が増加している。八種類の家庭電化製品のなかから五種類を選択すると、毎月三〇〇〇円強で賃貸してくれるサービスが人気で、四年間でも一五万円程度であるから、購入するよりもはるかに割安である。

花嫁の打掛や花婿の紋付は結婚式場でレンタルするというのが常識であるが、その宴席に招待された女性がハンドバッグなどをレンタルで調達することも流行しはじめている。話題のレンタルショップでは、高級ブランドのハンドバッグを数百種類も用意し、インターネットで注文するだけで、数一〇万円はする商品を一週間二万円程度の料金で自宅まで配送してくれるし、そのまま購入することも可能になっている。

このレンタル制度は様々な分野で発展しており、国内では六〇年代から営業しているレンタカーも昨今の不況を反映して需要が増加し、この一〇年間で一〇万台も車両が増加し、現在では三八万台のレンタカーが用意されている。また日本独自の発想で、八〇年代から創業した一週単位でマンションの一室を賃貸するウィークリーマンションは一日単位のデイリーマンションに発展し、出張の社員や受験の学生に人気である。

レンタルという商売は戦後に登場したかのようであるが、日本では伝統ある商売であり、江戸の庶民は生活の大半をレンタルでまかなっていた。住宅は大家から長屋を賃借し、布団や蚊帳、食料や雑貨も近所の商店から賃借して盆暮に決済するのが一般であった。新刊の書物は異常に高価であったため貸本を利用し、普段は下着をつけなかった庶民は、祭礼や吉原への遊興のときは、下帯でさえ賃借していたようである。

しかし、はるかな過去からレンタルの伝統を維持している世界もある。北米大陸の先住民族ネイティブ・アメリカンには、土地は子孫からの借物という思想が存在する。アリゾナの乾燥地帯に生活するナヴァホの人々を訪問したとき奇妙な光景に遭遇した。栽培しているトウモロコシの間隔が日本の何倍にもなっている。灌漑をすると土地の改造になるので、わずかな雨水だけで栽培できる間隔にしているのである。

さらに奇妙な現象も登場している。人口二〇〇万近いラスヴェガスは砂漠に建設されているが、水道も電力も贅沢に使用する生活を維持している。アメリカ有数のコロラド渓谷に巨大ダムを建設して導水している成果であるし、電力の一部もダムで発電されたものである。しかし、その大河の対岸に生活するナヴァホの人々は自然の改造を拒否し、現在でも雨乞いによって降雨を期待する生活をしている。そのままの自然を子孫に返却するためである。

レンタルとは視点を変更すれば多数の人々が共有することであるが、アメリカの生物学者ギャレット・ハーディンは「共有用地の悲劇」という有名な論文で、共有された土地は各人が勝手に使用するから、どこよりも最初に荒廃すると指摘した。自分の世代だけで私有から独占へと突進する強欲な西欧社会では妥当な見解かもしれないが、環境は未来の世代からの借物という思想で生活している社会では、共有は環境を維持する。

やはり北米に物事は七世代先までの子孫の生活を考慮して決定するという先住民族が存在する。現在から未来を予測するフォアキャスティングではなく、未来から現在をバックキャスティングして行動するという発想であり、最近流行しはじめた概念である。先住民族が数千年前から維持してきた叡智に遅蒔きながら西欧文明も気付いたのである。レンタルの流行には、このような背景がある。